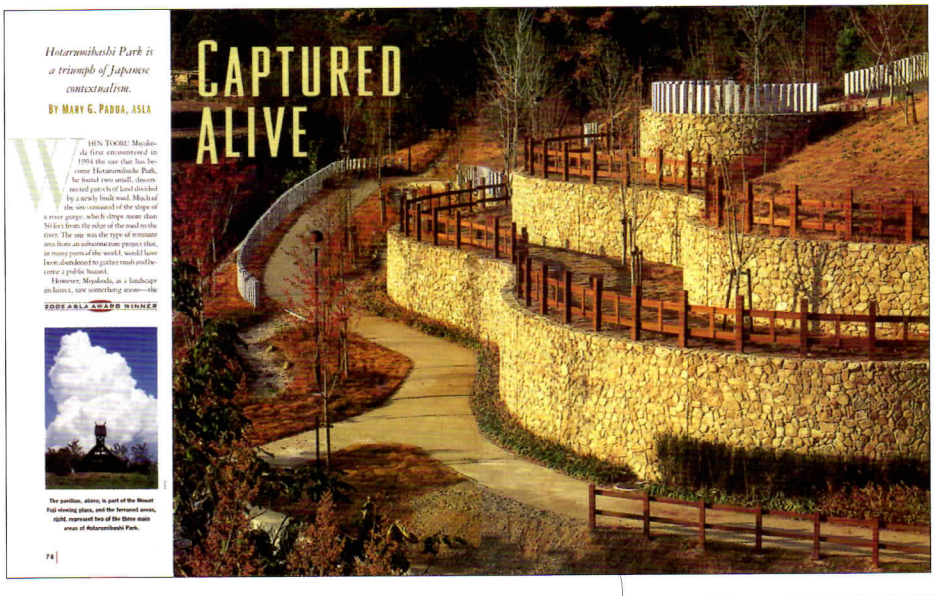
棚田学会通信

第53号 目次

特集　棚田は芸術（Ⅲ）・・・・・・・ 1
日本の棚田百選紹介・・・・・・・・・ 7
事務局ニュース・・・・・・・・・・・ 8

「四季千年神田図－田染荘」（秋：部分）（提供：豊後高田市教育委員会／チームラボ）

特集　棚田は芸術（Ⅲ）－棚田をモチーフに－



Hotarumibashi Park is a triumph of Japanese contextualism.

BY MARY G. PADUA, ASLA

WHEN TOORU Miyakoda first encountered in 1994 the site that has become Hotarumibashi Park, he found two small, discontinuous patches of land divided by a newly built road. Much of the site consisted of the slope of a river gorge, which drops more than 50 feet from the edge of the road to the river. The site was the type of remnant area from an infrastructure project that, in many parts of the world, would have been abandoned to gather trash and become a public hazard.

However, Miyakoda, as a landscape architect, saw something more—the

2002 ASLA AWARD WINNER

The pavilion, above, is part of the Mount Fuji–viewing plaza, and the terraced areas, right, represent two of the three main areas of Hotarumibashi Park.

78

CAPTURED ALIVE

「ほたるみ橋公園」（提供：都田徹）
The American Society of Landscape Architects 発行の雑誌 Landscape Architecture, 95(8), 2005 の掲載頁。
"CAPTURED ALIVE" とは「生捕り」のこと。

棚田の場の持つ舞台性や造形的な審美性に加え、人に創作活動を引き起こさせる力（創作誘発性）も無視できないだろう。演劇、音楽、造園、映像…、他にも様々なジャンルで棚田のエッセンスを活かし、あるいは深化・展開させた作品は多いはずだ。地球環境時代を生きる我々にとって、棚田というアノニマス（“作者不明の”、転じて“無名の人々による”）な「人の営みと自然の営みの共同作品」は、示唆に富むメッセージを発し続ける存在でもある。耳を澄ましてその「棚田の心」を聞き、その地の棚田の文脈（コンテクスト）に自身の創造的意匠を重ねつつ、作品を紡いでいく。それもまた、人の性（さが）なのである。

（棚田学会編集委員会）

ミュージカル作家・石塚克彦の「棚田への熱い想い」

ミュージカルカンパニーふるさきゃら　高橋 久代

「棚田と舞踊演劇」というテーマを頂き、第３回棚田サミットにあわせて発行となった『信州の棚田ものがたり』に、棚田学会副会長であり、ミュージカルの脚本・演出家（写真１）だった故・石塚克彦が、「棚田について芝居屋の私にできること」と題して、また、自身の棚田へのかかわりや思いを書いていますので、抜粋してご紹介します。

写真１　ミュージカル「男のロマン女のフマン」

『「信州の棚田」かかわりの想い』より
ふるさときゃらばん 脚本・演出家 石塚克彦

日本列島を北から南へと旅をして、ミュージカルを上演したり、脚本のための取材に走りまわるのが私の仕事である。

その中で幾多の棚田を見てきた事だろう。

城壁のように堅牢に築きあげられた棚田。崩れ落ちそうな地すべり地帯で、毎年毎年人々が手を加えやっと持ちこたえている棚田。移りゆく空の変化を水鏡に写し、変化する映像のシンフォニーのように美しい造形を見せてくれる棚田。黄金色の稲穂と段々ごとに曼珠沙華の赤が緞子を織りなす秋の棚田。凍てつく雪や霜におゝわれて、何千年も前からそこにあったかのような古代遺跡のように厳粛なたたずまいをみせている棚田。

山合いの水の流れを利用してつくられた谷地田に出合うと、それが日本の稲作の原点であったような感慨におそわれる。

そうした棚田が、旅の中で草茫々たる無残な姿になっていたりするのをよく見かけるようになり、胸つかれる思いになったりすることが多くなった。

日本の農村を撮り続け、すぐれた映像を残している報道カメラマンの英伸三さんに、撮るに値する棚田があるよと、九州・星野村の棚田を紹介したら、さっそく出かけた英さんは興奮して帰って来た。そして「石塚さん！棚田を何とかしましょうよ」と私に訴えてきた。

そう言われても、そういうことは政府の仕事であって、農水の大臣でもないただの芝居屋の私にどうのこうのできる筈もないのだが、身の程知らずの私は、棚田サミット！とか、棚田の写真展！とか、棚田を学問しよう！とか、ただ棚田！とか叫びだしたのだった。

ウルグアイラウンド前夜でもあり、今、日本農業は、少しでも規模の拡大を目指し、競争力をつけなければと、まァそういう流れの時期で、小規模の代表みたいな棚田はちょっと、などと農水省もノリが悪かった。だが私の叫びは、農水省の中にいるふるさときゃらばん応援団やら、当時大臣をしていた羽田孜さんのバックアップがあったりして、官庁の建物の中にもゆきわたったようだった。

そしてウルグアイラウンドが過ぎると、風向きは中山間地をどうするかに当たってきたようだ。農水省から、四国の椿原町が棚田サミットやりたいって言ってるから、会ってみたらどうかと言ってきた。役所の中にも心ある人がいるのだなァと実感した。椿原の町長さんもパワフルでノリがよかった。

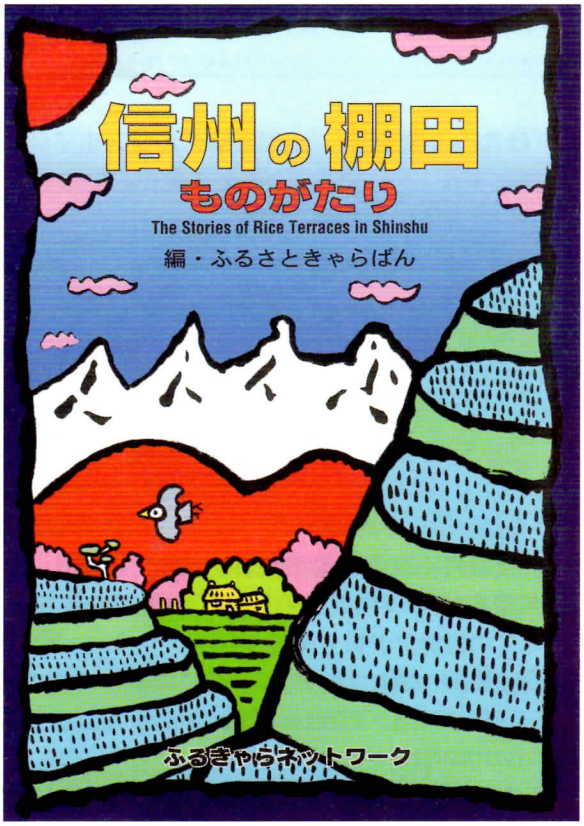
そして、第１回の棚田サミットが四万十川の源流域で実現した。主催者の椿原町は頑張った。もちろん私やふるさときゃらばんも頑張って全国の応援団に呼びかけた。農水省も協力を惜しまなかった。国土庁やJAもちょっと応援してくれた。おかげで、四国の山奥に全国から百自治体以上も集まってくれた。（中略）

棚田について　芝居屋の私にできること

私は芝居屋だから、私が棚田を応援するとしたら舞台でかなと思った。日本の稲作農家とアメリカの稲作農家が出合う、日米合作ミュージカルでは、舞台いっぱいに棚田の背景を組み、アメリカツアーに乗りこんだ。米をめぐっての日米摩擦のさ中であった。

日本のミュージカルでは、棚田の休耕田の段々にいっぱいの花を植え、片思いの青年が彼女にプレゼントするドラマをつくり、日本中を公演した。椿原の第１回の棚田サミットでも上演し、椿原町でもそれに向けて古い劇場を復元してくれたり、嬉しい出会いとなった。（中略）

信州の棚田を取材しての『信州の棚田ものがたり』の出版が企画できた。



『信州の棚田ものがたり』

次にやらなければならないという想いにかられているのは、首都のド真ん中で、大画面の棚田の写真展だろうか。壁一面が大きな写真で、その前に立つとまるで棚田の前に立っているような大型の写真展である。そんな棚田の風景が次から次へ部屋を変わるごとに現れてくるような。

棚田への世論をと言ったところで、棚田そのものを知らない人がこう多くては話にならない。多くの人に棚田のスバラシさを、大切さを知ってもらうにはこれしかないように思えるのである。（中略）

だが、壁一面に棚田写真などというと、一枚伸ばすのに百万円以上かかるだろう。それを数十枚、そのディスプレイなどとなると、億の金がいるイベントになってしまう。そんな協力が集まるだろうか。劇団の中からは、ミュージカルの脚本も書かずに何かんがえている！などの声もあがるだろう。

やっぱり無理かな。

だがこの本（『信州の棚田ものがたり』）のために集まってきた信州の美しい写真を見ると、首都のド真ん中で、壁一面に大きく引き伸ばしたアルプスのある棚田の写真を、ドーンと何枚も飾ってみたいと想う。そしてその隣の部屋は九州の棚田だ、その次は日本海に面した山陰や北陸の棚田……、やっぱり大変なこと考えちまっているなァ。（後略）

『信州の棚田ものがたり』（ふるさときゃらばん編／平成９年 10 月５日発行）

いつも「本気」でものごとに立ち向かう石塚さんは、台本を書くための取材のときも、稽古のときも、何に対しても妥協がありませんでした（以前役者だった私はその本気の演出からいつも逃げていました）。日ごろ石塚さんが抱いていた棚田への思いに、周囲の力や偶然という油が注がれ、「本気」に火が付き、誰にも消すことのできない炎となったのではないかと、３回忌を前にして思うのです。

棚田と歌

むらおこしシンガー　田中　卓二

棚田の芸術性について論じるとき、歌についても触れないわけにはいかないだろう。棚田の美しさは、その景観のみならず、土、水の匂いや感触、せせらぎの音など五感で感じる要素と、地域の伝統文化など地域固有の要素が一体となって醸成されている。何よりもお米という生命をはぐくむ食料の生産の場であることも忘れる訳にはいかない。そういった棚田の素晴らしさを、何らかの形で切り取ろうとするとき、歌や詩が作られるのだと思う。

名勝に指定されている姨捨の棚田の「田毎の月」の例を見るまでもなく、古来、棚田は、芸術家の心の深いところに触れ、様々な和歌や俳句を生み出してきた。また、それは、地域の民謡等の形でも歌い継がれてきている。一方、棚田の魅力は、現代人の心もとらえ、棚田をテーマにした新しい楽曲が生み出されてきている。

まず、最初に紹介するのは、「棚田へ行こう」である。宮崎県日南市で開催された第12回棚田サミットで、地元の子供たちが歌って披露された歌である。地元の音楽教室の鈴木康子さんが代表を務める子供たちとのコーラスグループ「シングアウトキッズ」のメンバー・スタッフで歌詞を作り、鈴木さんが作曲を担当した。それ以来、棚田サミット公式ソングとして親しまれ、各地の棚田サミットで歌い継がれてきた。躍動感のあるメロディーと、「晴れた日は棚田へいこう、じいちゃんの軽トラ乗って…」といった親しみやすい歌詞で人気を博している。

田植え唄を現代に甦らせたCD「早乙女田植え」も、出色の出来栄えである。関西を中心に棚田保全活動を行う「棚田むすびの会」がクラウドファンディングで実現させた。早乙女による田植えは、田の神のエネルギーを早苗から大地に通す役割で、巫女と同じく女性の仕事とされ、千年以上前から日本各地で行われてきた。機械化等にともない姿を消しつつあった早乙女の復活とあわせ、その田植え唄をCDにした。当初、会代表の中崎義己さんは、田植え唄の音源を集め再現しようとしたが、地方ごとにバラバラで曲調も現代の早乙女には馴染まず途方に暮れていたそうだ。しかし、チベット等世界各地の音楽を歌い奏でるシンガーソングライター・川辺ゆかさんとの出会いにより、田植え唄を現代風に作詞作曲するという新たなコンセプトの下でCDの制作を行うことができた。棚田が本来持っていたメロディーを復活させただけでなく、未来への架け橋となる作品となったこのCDは、棚田ネットワークを通じて全国の棚田地域に頒布されている。

その他、「棚田の歌」というジャンルとしては、千葉県鴨川市の大山千枚田のことを歌ったyaeさんの「千枚田讃歌」、山形県在住の須賀智郎さんの「棚田讃歌」等がある。また、メジャーレーベルのCDで棚田を扱った作品としては、「棚田桜」(三山ひろし)、「天空の空に月が降る」(さだまさし)等がある。

棚田と音楽は、親和性が高いのか、こういった棚田をテーマにしたオリジナル曲だけでなく、棚田で音楽祭も盛んに行われている。四ヶ村の棚田、大蕨、石部、上勝、那賀川町、岩座神等、収穫祭等とあわせ全国の棚田地域で音楽祭が行われている。詳しくは、棚田ネットワークから最近発刊された「全国棚田ガイドTANADAS」を参照してほしい。

実は、私自身も2004年、「棚田にて／妹よ」というCDを発表している。棚田学会の山形県現地見学会で出会った、霧雨にけぶる朝日町くぬぎ平の棚田との出会い、山形と学会の人たちとの出会い、そしてまだ生まれたばかりだった長男・春貴との出会い、これらの出会いの素晴らしさを歌にした。手前味噌になるが、本稿で紹介させていただいた棚田関係の歌の先駆けになった歌だったと自負している。

農村振興関係の仕事をしながら地域を題材にした歌を作り続けてきた。これからも、棚田に関わりながら「むらおこしシンガー」として人の心を温める歌を歌っていきたい。

空間造形としての棚田

(株)景観設計・東京代表 ランドスケープアーキテクト
都田　徹

1.「ほたるみ橋公園」(山梨県南アルプス市平岡：表紙写真)が空間造形としての棚田の例にあたるのだろうか？

ほたる見橋公園は「棚田」を対象として設計しようとしたものではない。棚田が設計の目的ではなく、公園の敷地が、美しい棚田のすぐ眼の前にひろがっており、「棚田」をどう考え、この「棚田」の風景を設計の中でどう展開するかということで設計が始まっている。すなわち「棚田」と「公園」との関係性をどのように創って行くかということであった。

2. 私はほたるみ橋公園の設計において、「棚田」の風景を公園の中に生捕りにした～空間造形家としての設計アプローチの仕方～。

(1) 棚田の持つ美しさの中から、棚田の景観要素をピックアップする。(設計エレメントを拾った。)―棚田の景観要素とは？―

1) 田んぼの区切りである石垣、稲の美しさ、田植え、稲刈り、あぜ道、あぜに咲く曼珠沙華がまず上げられる。

2) 棚田が存在する地域の歴史、文化。

写真1　棚田の中のランドマークとしての四阿

3）そして、棚田の修景となる水車、水車小屋、四阿（表紙写真、写真 1）等、公園設計のエレメントであり、地域のコンテクストでもある石垣（写真 2）、地蔵様等、地場の付属物等の修景のアクセサリーとしての数々のものが出てくる。

写真 2　棚田の石積みと同じ地元の石を公園の石積みに用いている

以上からも山間の棚田の風景は歴史的遺産であり、又地域での文化的遺産そのものでもある。

(2) ほたるみ橋公園で行った〝生捕り〟とは何か？

1）棚田にとっての借景であった富士山を公園の遠景とした（写真 3）。

写真 3　四阿は富士山を借景（生捕り）に

2）公園の眼前の棚田の背景の櫛形山をも前景の棚田の遠景とした（写真 4）。

3）又、動線（園路）をつづら折れとし、バリアフリーの勾配とした。

4）つづら折れとしたことにより、坂を降りながら風景が 180°毎に変化し、その変化毎の風景のおどろきと発見は、公園からの眺めが散歩の転換毎に“景色の生捕りを何度も行う”ようなつづら折れが表現されたと考える。

写真 4　ほたるみ橋公園からの棚田の風景

以上から、棚田の風景とほたるみ橋公園との関係はお互いのコンテクストの共有を行うことによるサステーナブルの関係をお互いが補捕しあっている関係が出来たと思っている。

(3) まとめ

ほたるみ橋公園は決して「棚田」を造ろうとしたのではなく、「棚田」はその美しさ、すばらしさ、凝縮した地域の人々の歴史や文化を知る上での地域の人達にとっての原風景であり、心象風景のはずだ。この景色を生捕ったことにより、ほたるみ橋公園は「棚田」の招介を行い、「棚田」への視点の大切さを訪問者に感じさせることを、努力した公園とした例の 1 つになったと考えている。棚田をとりこにした公園は、歩くこと散歩することによって「棚田の風景」を享受することができるようになった。

棚田が存在することによって生まれた「ほたるみ橋公園」の公園設計は棚田の風景を生捕ったことにより、アメリカで最も有名な権威あるランドスケープ協会のランドスケープ・デザイン賞を 2001 年に受賞している。題名はサステーナブル・デザイン賞である。又は、「棚田の風景を生捕りにした公園」としても良いと思っている。

デジタルアートに映し出された原風景「四季千年神田図－田染荘」

豊後高田市教育庁　文化財室　**松本　卓也**

「田染荘」は大分県国東半島の西側、豊後高田市の南部に広がる田染盆地を舞台に展開した荘園村落である。田染地区には中世の田園景観が残されてお

り、美しい曲線を描く傾斜のゆるやかな棚田は、江戸時代に描かれた村絵図の景色と符合する。中でも田染小崎は約 90 ヘクタールの水田がまとまって存在し、古い時代の土地利用・水利慣行などが現代に踏襲されている。また、聳える岩峰は風景にアクセントを加えるだけでなく視点場になっており、六郷山の修行場「夕日岩屋」から水田を見下ろせば、「天然の航空写真」というべき絶景が広がり（写真 1）、訪れる者を惹きつけてやまない。「田染荘小崎の農村景観」は、荘園時代の日本の姿を今に伝える貴重な場所として、平成 22 年には国の重要文化的景観に選定されている。

写真 1　田染荘小崎　夕日岩屋からの眺め

平成 28 年 1 月、豊後高田市では新庁舎が完成し、エントランスに 1 点のデジタルアートが掲げられた。チームラボ制作の「四季千年神田図 - 田染荘」（表紙写真）である。高さ 120cm ×幅 410cm の屏風型の画面に蒔絵のような色づかいで農村の風景が表現されているこの作品の最大の特徴は、画面の中の人々が動き、四季の移ろいの中で農村の営みを繰り返していく部分にある。画面上の季節は 1 年間をかけてゆっくりと 1 周し、日の出や日の入り、天候も田染荘とリンクしている。人々はそれにあわせて田植えをし（写真 2）、成長した稲を刈り取って稲掛けや藁こづみを作り、豊作に感謝する祭りを行う（表紙写真）。細かく見ると、魚を釣る人や、村の鎮守に詣でる人、牛を連れる人など、実に多様な人物がいきいきと活動している。中世から変わらず続いてきた田染荘と同じように、この作品もほとんど変化せずに進んでいくが、よく観察すると 2 度と同じ瞬間を見ることはできない。それは、この作品のテーマが「自然と人の共生する美しさ」や「前近代的で穏やかな生活の歩み」であるからである。

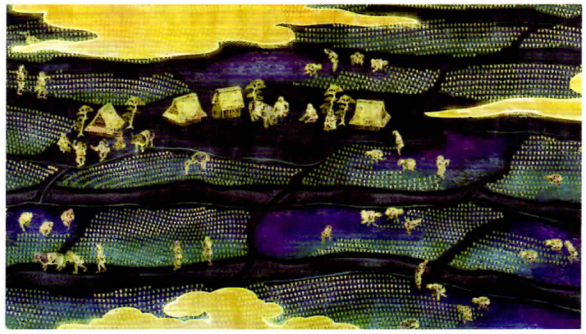


写真 2　「四季千年神田図－田染荘」（春：部分）

チームラボは田染荘を訪れた際、里山や水田の美しさや気持ちよさにインスピレーションを得て、ミラノ万博でベストプレゼンテーションを獲得したアート『ハーモニー』を制作している。『ハーモニー』は稲穂をかき分けて進む空間を歩き回ることで、日本の水田を体感できる仕掛けになっている。近代以前の風景が広がっているからこそ、数少ない里山の気持ちよさを感じられる場所として、実は新しい社会のヒントを得ることができるのではないか、とチームラボは田染荘の景観を捉えている。そして、その視点はアートとなって映像の中で変化する自然や動き回る人物に散りばめられたのである。

田染荘の景観は中世、近世、近代を通して、緩やかで穏やかな歩みを続けてきた。不揃いな水田や石積みの堰は、現代人には決して便利とは言えないものである。しかし、自然と共生する中で作られたそれらが、ふとした瞬間に見せる輝きは、何事にも代えがたい日本の原風景として、我々の胸に焼きつくのではないだろうか。その感覚は、現実の田染荘でも、アートの田染荘でも、きっと変わらない。

新刊紹介

上野　裕治 著　『案山子の詩』

棚田学会理事　**安井　一臣**

「案山子の詩」は田んぼの脇に立つ“モダン・カカシ”の写真集ともいえる本である。最初に手にした時、ページを繰りながらモダン・カカシたちを眺めた。そこには人形（ひとがた）のカカシをはじめ、狸や犬、フクロウや鷲、人参や玉ねぎ、キリンや鯨などが登場する。極めつきは「逃げる犬と追いかける私」の 3 連作。狸や兎、犬、私（人）、

熊、ヘビが追いつ追われつの愉快な情景には心から笑ってしまう。

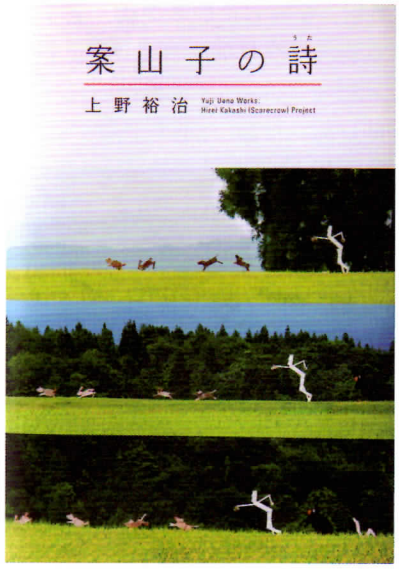
ここで一息入れて、「比礼カカシ・プロジェクト」の紹介文や「カカシの歴史と今日的意義」の解説文を読んで再びページを繰ると、新たにカカシが持つ社会的価値・意義という側面が見えてくる。

私が「唱歌・案山子」を教わったのは小学校低学年の頃であった。カカシ（人形）の役目はスズメやカラスを田畑から追い払う、というのが一般的なイメージだろう。だがこの唱歌には、“天気もよいのに蓑笠つけて”や“山では烏がかあかと笑う”という歌詞があり、子供心にもその役目には“？”マークが付く。

その一方、稔りの秋を迎えた田んぼの畦道を歩いていると、群れをなしたスズメが人の気配を感じていっせいに飛び立つ場面に出くわすことがある。現代より米の社会的位置付けが高かった昔日、農家の人がこの場面に出くわすと大きなストレスを感じたに違いない。祈るような気持ちでカカシを立て、スズメ除けを願ったとすれば、その心情は理解に余りある。

カカシは英語ではScarecrowと呼ぶ。直訳すれば“カラスおどし”となる。中国では稲草人と呼ぶという。丹精込めた農作物を狙う里山の鳥たちは、洋の東西を問わず悩みの種らしい。

時代は移り21世紀を迎えた今日、米作りの技術革新も進んだ。棚田の社会的価値も生産性優先から多面的機能重視へと移ってきているように思う。



〔発行：新潟日報事業社　価格：1,800円＋税〕

著者・上野裕治氏は、今ある（棚田や里山の）風景に（カカシという）ひと味を加えることによって、その風景がぐっと美しくなり、楽しくなると説く。全く同感である。ここでモダン・カカシの登場である。

これからもカカシの主役は人を含めた“生きものたち”であろう。そう考えると、季節ごとの野の花、トンボやタガメなどの昆虫、カエルをはじめとる両生類などが、モダン・カカシの仲間入りをすれば、その風景はさらに魅力的となるだろう。子どもたちは喜び、大人たちは心の底から和まされる違いない。本書はそのようなことにまで夢を広げてくれる。棚田ファン必読のお薦め本である。

日本の棚田百選紹介

大分県宇佐市「両合棚田」

大分県宇佐市地域おこし協力隊　佐矢　彩華

大分県宇佐市院内町は「日本一の石橋のまち」として知られ75基の石橋の数を誇る町である。これらの石橋は江戸時代の終わりから昭和の初めにかけて構築されており、これほどまでに多くの石橋が造られた理由として幾つもの深い谷間に集落が点在するという地形が深く関わっている。集落を結びつけていくように多くの橋を架けていく必要があったのだ。また、深い谷間を流れる川は急激で、仮に集落同士を木造の橋で架け合わせたとしても崩れ落ちてしまうため、今日にみられるアーチ形の石橋が作られるようになったのだ。もともと谷あいの棚田を区切る石垣や水路の築造によっても石工の技術が必要とされてきた町であるのだが、見事にその石積みの文化を表出している両合棚田について紹介させていただきたい。

両合棚田は院内町南部の9つの集落から成る余谷地区に属し、その中でも最奥地となる小平・滝貞の両集落の地区の棚田の呼称である。近世（戦国～江戸時代）にかけて開拓されてきた棚田が姿を残し、1999年に日本の棚田百選に選定されている。「これぞ日本の原風景である」と多くの人々を魅了した両合棚田であったが、多くの中山間地域が抱えるように過疎化や高齢化・獣害被害の深刻化から棚田の5分の4が耕作放棄地となり、かつての景観が失われていった。

そんな中、2013年に国東半島宇佐地域における「クヌギ林とため池がつなぐ農林水産循環」が世界

農業遺産に認定された。世界農業遺産とはFAO（国際連合食糧農業機関）によって提唱された取り組みで、社会的・経済的、生態学的な変化に適応しながら進化を続けている無形の農業システム（生きている遺産）の保全を図ることが目的である。宇佐地域においては世界農業遺産の価値を体系的に示すシンボルスポットの創出が課題となっており、院内町余谷にある両合棚田が注目された。

2016年5月に地元と行政とで作る両合棚田再生協議会が発足。様々な分野における専門家が手を取り合い、棚田の再生を中心に中山間地域の抱える課題解決に向けた地域活性モデル「Small Cycle Project」（図－1）が策定された。

図－1　余谷における地域再生モデル「Small Cycle Project」

写真1　2017年に実施されたお田植祭での様子

2017年6月にはSmall Cycle Projectの事業モデルにのっとり、地元南院内小学校生徒と立命館アジア太平洋大学の学生の共同作業によるお田植祭が実施された（写真1）。今後も、地域住民による民泊の開始や空き家の再生の取り組み等が予定されている。今、両合棚田では伝統的な農業・農法や豊かな生物多様性を次世代に継承していくことが求められる一方で、地域の人々に誇りと自信をもたらすとともに、農産物のブランド化や観光客誘致を通じた地域経済の活性化が期待されている。

写真2　両合棚田遠景

事務局ニュース

◎棚田学会じょんのびグループから『棚田作品集』が刊行されました！棚田に魅せられた8人の会員の皆さんが、四季折々の美しい棚田の写真・絵画を収めた作品集を作りました。60頁、57点の作品を収めています。入手希望の方は、永田博義さん（電話047-345-4483）まで。頒価1500円。

◎棚田学会発表会のお知らせ

2017年12月2日（土）　13時30分～17時
会場：立正大学品川キャンパス11号館6階1161教室、発表者：佐藤佳代、三上勇太、石田美佳（立正大学文学部）・高山七星、我妻園華（群馬県立利根実業高校）・加納奈樹（三重大学生物資源学部）・菊地稚奈（九州大学大学院芸術工学府）

◎**棚田学会誌19号（2018年夏発行予定）への投稿募集中！**　締め切りは2018年1月10日です。論文、事例研究、各地の棚田保全活動の報告等、奮って執筆して投稿してください。

【編集後記】

この3回の特集で、『棚田藝術論』なるものが、少し見えてきました。　（大澤啓志）

棚田学会通信　第53号　2017年10月30日発行
発行 / 棚田学会
〒169-8050 東京都新宿区西早稲田1-6-1
早稲田大学教育・総合科学学術院　高木徳郎研究室内
TEL: 03-5286-1572　FAX: 042-385-1180
E-mail: tanadagakkai@gmail.com